

だから俺は魔力供給を断れない

なめこ印



ファンタジア文庫

2824

口絵・本文イラスト よう太

『神授の英雄』と呼ばれたその男は世界最強の魔導師だった。

彼はその強さの理由を人から尋ねられると、いつもこう答えていた。

「俺の強さは女神たちから授かったものだ」と。

次にその女神とはどこで出会ったのかと尋ねられると、

彼は「学生時代に」と照れ臭そうに答えた。

これは、やがて魔神王と戦う英雄の——その学生時代の物語だ。

だから俺は
魔力(3)供給を
断れない



目が覚めたら美少女が寝ている俺の顔を覗き込んでいた。
そのあまりの至近距離っぷりに一気に意識が覚醒する。

「……のわあああ!？」

「あ、起きた」

「え!? 何!? 誰誰誰!？」

俺は動揺のあまり肘をつかって後退り、美少女から距離を取る。

「ん?」

美少女は壁際に逃げた俺を見て、怪訝そうに小首を傾げる。

当然、俺の記憶にこんな美少女の知り合いはいない。初対面だ。

「え? いや、何これ、何だこの状況?」

プロローグ

▽ムリだムリだ△

俺は両手で頭を抱えて記憶を掘り起こす。

で、最初に思い出したのが、目前に迫るトラックのバンパーだった。

「……………」

そうだ、俺、漫画を買いに久しぶりに外に出たんだ。

それで確か……信号無視のトラックが突っ込んできて……。

目前に迫ったバンパーが……気づいたら美少女の顔になっていた。

……あれ？

「????？」

撥ねられたところまでは覚えてる。

でもその後はまったく思い出せない。

目が覚めたらいきなりここにいた。

「おい、きみ。大丈夫？」

パニックになっている俺に、先程の美少女が話しかけてきた。

「あ、ありがとう」

俺は彼女が差し出してきた手を借りて立ち上がる。

「！」

なんだこの手、ちっちゃ、やわらか……………！

ていうか、やっぱりこの娘カワイイ。カワイすぎる。

しかも童顔なのにオッパイがデカイ！

今まで見たどのグラビアアイドルをも超える最大級オッパイだ。

その質量だけで男なら何人だって殺せそう。

いわば無差別オッパイ兵器。

そんな凶器が先程から俺の鼻先で、彼女の呼吸に合わせて小さく揺れている。

こんな間近でオッパイを見たことのない俺は、つい状況も忘れて生唾を呑み込んでしまった。

「ねえ、きみ。本当に大丈夫？」

「えっ？ あ、ああ、うん」

俺はオッパイに視線を釘付けにされながら返事をする。

その返事に、美少女はホッとしたようだった。

「そっかー、よかった。どうやら召喚は上手くいったみたいだね」

「えっと……………それより、その……………あ、あなたは、誰？」

「えっ……………それより、その……………あ、あなたは、誰？」

召喚とか変な言葉も聞こえたが、俺はとりあえず気になることを尋ねた。

なんかキョドッた口調になっちゃったけど仕方がない。

こんな美少女に話しかけるなんて、生まれてはじめてなんだよ！

「ああ、そっか。まずは自己紹介しないかね」

美少女はコホンッと咳払いして、自分の胸に手を当てる。

「私はロザリー。若くしてノートンクロス魔導学園の教授を務める天才魔導師さ！」

「ま、魔導師？」

「親しみを込めて大魔女と呼んでくれてもいいよ！」

漫画やゲームで聞く単語が出てきちゃった！

確かにロザリーの格好はどことなく魔女っぽいけど。

「ちなみにここは、さっき言った魔導学園にある私の研究室だよ」

そう言っておろザリーは自慢げに両手を広げる。

改めて言われてみれば、この部屋は確かに研究室っぽかった。

やたら多い本棚と古びた本。

理科室にあるみたいな長机。

何かの実験器具に怪しげなミイラ。

俺には解説不能な魔法陣らしき紋様。

あとなぜか部屋の奥にベッド。

そこだけ妙に生活臭がするな……。

ほかにもよく分からないものがたくさん。

「ほ、本当に魔女なのか？」

「その通り！ 信じてくれて嬉しいよ！」

ロザリーはえへんと胸を張る。

おっぱいがポヨンと揺れた。

その神秘の揺らめきに俺はしばし目を奪われ……。

つとと、危ない危ない！

危うくオッパイの誘惑に流されて、全てがどうでもよくなるところだった。

彼女のオッパイは素晴らしいが、まだ大事な質問が残ってる。

「それでロザリー、さん」

「さんはいらないよ」

「えっと、じゃあロザリー……俺は何で、ここにいるんだ？」

「うん。それも今から説明するね」

ロザリーは頷く。

「その前に、きみの名前は？」

「あ、俺はカイト」

「カイト。いい名前だね」

ロザリーは微笑むが、すぐに真剣な表情になる。

「じゃあ、落ち着いて聞いて欲しいんだけどね、カイト……実はきみは一度死んでしまっただんだ」

「……え？」

当然驚いたが、心のどこかで俺は妙に納得していた。

なにしろ残された記憶がトラックに撥ねられる直前だ。

とても逃げられる距離ではなかったし……。

あんなの死んだに決まってる。

「でも、何で死んだはずの俺がこうして生きてるんだ？」

「それはね、死んだカイトの魂を私がこの世界に召喚して生き返らせたからだよ！」

「生き返らせた!? 魔女ってそんなこともできるのか!？」

まるで神様みたいだ。

いや、ロザリーの場合は女神か。

確かに彼女のオッパイの美しさを見れば、女神というのも納得だけど。

「あーいやいや、誰でも生き返らせられるわけじゃないよ」

「？」

「この召喚魔法は特殊で、『魔人』の魂のみを異世界から召喚して復活させるんだ」

「魔人って？」

「カイト自身のことさ。正確には、カイトが元いた世界の住人を、私たちの世界では『魔人』と呼ぶ」

つまり「地球人＝魔人」ってことか。

なんかカッコいい呼び名だな。

てかここ異世界なのか。

いや、魔法とか転生とか言われた時点で、そんな気はしてたけど。

「……あれ？ でも何でロザリーは俺を生き返らせてくれたんだ？」

「それはきみに協力して欲しいことがあるからさ」

「協力して欲しいこと？」

つまり俺にやって欲しいことがあるのか。

なるほど分かりやすい。納得した。

「オツケー。何か知らないが、何でも協力するぜ！」

「おおっと!？」

俺が速攻で了承すると、ロザリーはその場でズッコケてみせた。

「器用だなー」

「大魔女だからね！」

ロザリーは俺にツッコミながら素早く立ち上がる。

「っていうか、いくら何でも話が早すぎない!? 大魔女の私でも心配になるよそれは」

「いやだって、ロザリーは俺のこと生き返らせてくれたんだろ？」

「う、うん。まあそうなるね」

「だったら恩返ししないとダメだろ！ 何て言うか、人として！」

それにロザリーはスゴい巨乳だし。

しかも見たこともないような美少女。

おまけに命の恩人とまできたら、そりやもうどんな頼みだって聞いちゃう条件揃い踏み
の満塁ホームランだ。

「つーわけで何でも言ってくれ！ 俺にできることなら何でもするぜ！」

「今何でもって言った？」

「おう！」

「う、うーん、話が早いのは助かるけど……」

俺が力強く頷くと、ロザリーは少し考え込む。

が、すぐにニパツと笑って。

「いや、うん！ その思い切りのよさは気に入った！ どうやらきみの魂を選んだ私の目
に狂いはなかったようだ！」

「おふう!？」

いきなりロザリーに抱きつかれて、俺は変な声を上げてしまふ。

だって、胸が！ 胸だ！

彼女の柔らかいオツパイが密着しているううう！

「私の目的はね、きみ……いや、この呼び方も他人行儀だ」

コホンツ、とロザリーは一度咳払いをする。

「カイト。きみは私と一緒に最強の魔導師を目指し、そして魔神王をたおすんだ！」

「おお……！」

最強を目指してなんか悪そうな奴をやつつけるのか！

なんだそれテンション上がる！

「具体的にどうやって、っ？」
 質問をしようとした俺は、唐突な立ち眩みに襲われてよろけた。

「大丈夫？」
 「大丈夫？」

一瞬たたたらを踏んだ俺を見て、ロザリーが心配そうに小首を傾げる。

「ああ、なんか急に立ち眩みがして」

「それはたぶん、魔力切れによる魔力欠乏症だね」

「魔力切れ？」

「魔人のきみがこの世界で生きるには魔力が必要なんだ」

「へえー……え？ でも俺に魔力なんてないぞ？」

「うん。だからこのままだとカイトは衰弱死しちゃう」

「えええ!!」

俺、大ピンチじゃん!?

生き返ってすぐ命の危機なんて洒落にならん!

「どっどっどうすればいいんだ!」

「落ち着いて。ちよつと待ってね」

そう言うのとロザリーは少し俺から離れて——自分の上着のボタンをはずした。

「!?……え？」

呆気に取られる俺の前で、彼女はそのまま上着をべろんと脱いで、その大きなオツパイをぶるンツと曝け出した。

「!?!!?!」

ななな生オツパイ!?

あの夢にまで見た生オツパイが俺の目の前に!?

あれ!?! やっぱり俺死んだんじゃない!?

だってこれが現実なんて信じられねえよ!?

「アイデデデ！」

思わず頬をつねったら痛かった。

つまり夢じゃない!?

ヤバい。自分が死んで生き返ったって聞いた時より動揺してる。

童貞の俺にこれは刺激的すぎるって!

「そんなメチャクチャ動揺しないでよ。私だって恥ずかしいんだぞ」

ロザリーは頬を赤らめながら小さく文句を言う。

「いや、じゃあ、何で脱いだの!?!」

「ん……実は魔人のカイトには、魔力を作る魔力生成器官はないけど、その代わりいくらでも魔力を溜め込める魔力受容体があるんだ」

ロザリーは一から説明を始める。

「それと、文献によると魔人には『吸精』という能力があるらしい」

「吸精？」

「うん。そのものズバリ、『他者から魔力を吸い取る』能力さー！」

「……ってことはつまり、その吸精ってのをすれば俺は助かるんだな？」

「そう。だけど、吸精はもつとすごい能力なんだ！」

ロザリーはキラキラした目で説明を続ける。

「この世界では本来、女性にしか魔法は使えない。それはさっき言った魔力生成器官が女性の胸部にしかないからなんだ」

「胸部……」

俺の視線はまたロザリーのオッパイへ。

彼女がマジメな話をしてるのに、どうしてもチラチラと……誘惑に抗えない！

「魔力がなきゃ魔法は使えない……でも魔人であるカイトなら、吸精によって魔力を吸収して男でも魔法が使えるんだ！」

「ふむふむ」

「しかも溜められる魔力量は無尺蔵！ つまり魔力を吸えば吸うほど、より強力な魔法が使えるようになるんだ！」

「ほうほう」

「で、なぜ服を脱いだのかって話に戻すと、それは今からカイトに私の胸を吸って吸精をしてみたらうため、というわけさー！」

「ほむほむ……って、ええええええ!？」

オッパイに気を取られていた俺も思わず仰天する。

だってそれって要約するとつまり!？」

「俺はロザリーのオッパイを吸えば吸うほど強くなるってことか!？」

「その通り!!」

俺の渾身の絶叫に、ロザリーは堂々と頷いた。

第一章

▽オッパイ吸って強くなれ！△

オッパイを吸うほど俺は強くなる。

驚愕きょうがくの事実を知らされた俺の前には、相変わらずロザリーの生オッパイ。

「さあ！ 魔力切れを治すついでに早速さっそく吸精の練習だ。私の魔力を吸って元気になりたまえ！」

ロザリーはさあどうぞという顔で両腕りょううでを広げる。

彼女は堂々と笑みえを浮かべているが、ほつぺたには朱しゆが差している。

恥じらいつつ、魔力切れを起こしている俺のために吸精させてくれようとしているのだ。それだけでも感動ものなのに……！

今！ 目の前には憧れあこがの女の子のオッパイが！

もう感謝と感動でむせび泣きそうだ。

俺つてば週刊誌のグラビアとか最初に見るタイプのオッパイ星人だし。

長い年月鍛え上げた選乳眼せんにゅうがんは服の上からでもバストサイズを当てられる。

でもこんなスケベ野郎やろうなのでカノジョとか今までできたためしがないッ！

だから俺の知ってるオッパイって、映像か、写真か、妄想もうそうばかり。

けど……けど！

本物の！ オッパイが！ 今、こんなに近くに！

もう陳腐な表現だけど、真っ白なデカイマシユマロみたいだ!!

「ああああの！ 魔力を吸うって、つまりその……オッパイに触さわってもいいってことでしようか!？」

「もちろん」

嗚呼、神様仏様ロザリー様ありがとう！

俺生まれきて、いや、生き返って本当によかった！

俺正座、からの土下座。

ロザリーとオッパイに礼！

「じゃ、じゃあ、是非ぜひともよろしくお願いします！」

「うん。やさしくね」

「もちろんですとも！」

「ん。それじゃ、よいしょっと」

ロザリーはびよんつとジャンプして研究室の長机に腰かける。

「ほら、カイトはそこの椅子に座って」

「あ、ああ……！」

俺は言われた通り机の椅子に座る。

すると、ちょうど俺の目線の高さとおッパイの高さがピッタリとなって、あとは顔を前に出すだけでその先端に吸いつくことができる塩梅になった。

「はい。どうぞ」

ロザリーは改めてもう一度両腕を広げる。

今すぐその胸の中にダイヴしたい！

いや、いや、でも待て！

まずは触り心地を確かめてみたい！

「……っ」

クソツ、手が震える。

静まれ俺の右手！

俺はブルブルする右手の手首を左手で押さえながら、ゆっくりとロザリーのオッパイへ手を伸ばし、

ぽによんっ

と、ついにその胸に触れた。

うおおおやわらけええええええ！

手から胸が溢れて零れる！

やっぱりデカイ！

スゴくデカイ！

そしてメツチャ柔らかい！

指が沈む！

けど確かな弾力があつて……揉んでいるだけなのに気持ちいい！

「あんっ」

「……！」

ロザリーが不意に漏らしたその声で、完全にスイッチが入った。

今からこの胸を、オッパイを、吸う！

「それでは吸わせていただき……！」

「あ、ちょっと待った」

「なああああああ！」

まさかの「待った」をかけられ、俺は絶叫を上げる。

「つて、ここまで来てお預けて、シな殺生な！」

まさか直前で気が変わったのだろうか？

さすがにそれはツライ！

あまりにもツライ！

血の涙を流すほどシヨックだ！

「コラコラ、ちょっと落ち着いて」

「あ、はい」

冷静に窘められ、俺は少し身を引く。

「ひとつ説明し忘れてた」

「何を？」

「吸精をするには、まず聖母の契約を交わす必要があるんだ」

「聖母の契約？」

「うん。聖母は魔人に力を与える存在なんだ」

「なるほど。それで、どうすればいいんだ？」

「簡単さ。『俺の聖母になってくれ』 ってきみが問うて、私がそれに同意すればいい」

確かに簡単だった。

俺は早速契約をするため、ひとつ咳払いをする。

「えっと……ロザリー、俺の聖母になってくれ！」

「うん。いいよ」

ロザリーが頷く。

すると、不思議な紋章が彼女のお腹に浮かび上がった。

「これで、契約は完りよ、ん！」

「ロザリー！」

急にロザリーが机からズリ落ち、俺は慌てて彼女を受け止める。

何とか彼女が落ちるのは防げたのだが。

「シンンン!？」

俺の腕に抱かれ、ロザリーはさらに悶絶する。

「ロザリー、だ、大丈夫なのか!？」

「だ、大丈夫だよ」

「でもそうは見えない……」

ロザリーは呼吸も荒く、頬も赤くなっている。

まるで急に風邪にかかったみたいだ。

しかし、心配する俺に対し彼女はもう一度「大丈夫」と言う。

「これは契約の効果だよ」

「契約の？」

「そう。吸精時は女の子が性的興奮状態である方が魔力の吸収効率が高くなる。だから吸精される時の聖母は全身がとっても敏感になるんだ」

「……もう一回言ってる？」

「吸精される時の女の子はとてもエッチになる」

「何その設定!？」

この能力エロすぎませんかねえ!?

俺が驚愕している間も、ロザリーはハアハアいつている。

「でも……これは想像以上だね。カイトが触つてるところがスゴく……ムズムズする」

俺の腕の中で、ロザリーは全身をもぞもぞと振らせる。

自分で言っている通り、たぶんあちこちムズムズしているのだろう。

その姿はこの上なくエッチだが、ちよつと苦しそうだ。

「ハア、ハア……」

「ロザリー、本当に大丈夫か？」

「もちろん! ……と言いたいところだけど、ひとつ大変なことに気づいちゃったよ」

「な、何だ!？」

あまりに深刻そうに言うので、俺はゴクリとノドを鳴らした。

それからロザリーは……なぜか俺の胸にギュツとしがみついで。

「……だつこヤバイ」

と、艶っぽい吐息を漏らしながら答えた。

「だつこ？」

「うん。さつきカイトにギュツてされた時、お腹の下がキュンッ……て」

「……!」

ギュツて、机から落ちたのを抱き留めた時か？

お腹の下がキュンッて、もしかして……!?

「スゴいね。これはひとりじゃ分からなかった。大発見だよ」

「お、おう」

「ねえ……もつとギョッして?」

俺にだっこされるロザリーの顔はもうトロトロになっていた。

さっきまでの余裕のある表情じゃなくて……。

なんていうか、童貞の俺が言うのもなんだけど、スゴく雌^メって感じがする。それにだっこが好きって、子供らしくてカワイイ。

つまり今のロザリーはエロくてカワイイ。

ふたつのギャップの相乗効果が合わさり最強に見える。

おまけにだっこするとオッパイが密着して潰^{つぶ}れて、ちよつと視線を下げるとご飯三杯はイケそうな素^す晴^ばらしい光景が……眼福眼福。

「ホントに、だっこされるのヤバイ……強く抱き締められると敏感になった体どころか、頭までおかしくなりそうだよお」

ロザリーは蕩^{うち}けた顔で、もつともつと俺にだっこをせがむ。

俺がさらに強く抱き締めると、彼女はその度に全身を震わせた。

「んっ……あんっ!」

俺にだっこされているロザリーは、時折細かく体を揺^ゆすっていた。

子供がむずがっているような仕草だが、彼女が胸の先っぽを俺の胸板^{むねいた}に押しつけている

ようだ。

その先端は硬^{かた}く尖^{とが}っていて、押しつけられると少しくすぐつたい。

俺の腕の中で、彼女が興奮しているのが分かる。

思った以上にそれがドキドキした。

しかもこれ全部、彼女が自分からしてくれたことなのだ。

こんなカワイイ子が俺のためにここまで尽くしてくれるなんて。

生前の俺じゃ考えられなかったな!

「ねえカイト、キスしてえ」

「キキキキキスっすか!」

「お願い」

トロけきったロザリーが腰をクネクネさせながらせがんできた。

スッゲーエロカワイイ!

こんな子にお願いされたら、どんな願いだって叶^{かな}えてあげちゃう気になる。

でも、キスって、あのキスだよな?

あの恋人^{こいびと}同士がやるアレ。

それくらい知ってるけど、いざするとなると緊張^{きんちやう}しちゃう……!

これだけいろいろやっついて、今更って言われそうだけど！
根っからのスケベ野郎でも、こういう時になると緊張しちゃうのがチェリーハートって
もんなんだよ！

「もしかして、カイトはキスはじめて？」

「はい！ そうです！」

「じゃあ私とお揃いだ」

「え……じゃあ、ロザリーもはじめて？」

「フツフツ。なにしろ生まれてこのかた15年！ 研究一筋で、キスどころか男の子と手を繋いだ経験すらゼロさ！」

とても堂々とした口調でロザリーはそう言い切った。

そうも言い切られると、俺の気持ちも多少楽に……。

……ん？

15年？

「えっ!? もしかしてロザリーって俺より年下!？」

「失敬だなきみは！ 私がそんな年増に見えたんだ!？」

「い、いや……」

逆に見た目通りの年齢で驚いたというか。

オッパイのサイズで年齢を誤認してた部分もある。

15歳って、元の世界換算だとほぼ中学生……中学生でこの大きさなのか。

「あっ！ でも私を子供扱いするのは厳禁だからね！ 年下でも、私は教授で偉くて天才の大魔女なんだぞ！」

「お、おう。分かった！」

今の態度は逆に年相応っぽかった。

頭のいい子供が背伸びしてる感じ。

きっと自分を天才天才言うのも、この少し偉ぶった口調も、若いからって舐められないための手段なんだろうな。

けどそうか、ロザリーって年下なのか。

「……」

年下巨乳美少女魔導師。

並べるとなんかパワーワードができた。

しかもその娘は俺にオッパイ触らせたり吸わせたりしてくれる。

ヤバイ。俺、生き返って早々一生分の運を使い果たしたんじゃないか？

だとしてもまったく悔いはないけど！

「カイト、お互いの初ちゅーの前にイイコト教えてあげるね」

「イイコト？」

「女の子のね、気持ちよくなるトコロって、口の中にもあるんだよ？」

「そう言うのとロザリーは口を開け、んべつと舌を上げる。」

「このね、舌の裏側」

「……！！」

ロザリーの指差す舌の裏側を、俺はドキドキしながら見つめた。

「前に歯磨きした時に見つけたの……」

と、やはり喋りづらかったのか、そこでロザリーは一回口を閉じる。

「……この粘膜って元々敏感なんだけど、私は特に敏感みたい」

「えっと」

「たぶん、男の子に舐められたらイチコロ」

「つまり……」

キスの時にそこを舐めろってこと？

え？ いきなり舌入れるんすか!?

思わぬアダルトな要求に、俺はビックリ仰天する。

「な、何でそんなこと教えてくれるんだ？」

「女の子の性的興奮によって吸精の効率は上がるって言ったじゃないか。これからも吸精をする前は、ちゃんと女の子をエッチに昂ぶらせてあげなきゃなんだよ？」

「……！！」

「だから、これはその練習」

「な、なるほど！」

そうだった。

これは大事な吸精の練習。

俺が強くなるためには、この能力を使いこなすことが必須。

これができなきゃ彼女の役に立てないんだ。

それはダメだ！ それはイカン！

命の恩人である彼女の夢に協力すると、さっき誓ったばかりじゃないか。

いくら俺がスケベ野郎でも、大事な約束は守らないとダメだ！

恥ずかしきろうが何だろが、これは絶対により遂げるべきだ。

それに第一——ロザリーがここまでしてくれてるんだ。

女の子の恥ずかしい部分を曝け出して頑張ってくれている。
これに応えなきゃ男じゃない！

「よし、いくぞ！」

「……」

俺が気合いを入れると、ロザリーはスッと目を閉じてくれた。

「つつっ」

俺は緊張しながら、少しずつロザリーと顔を近づけた。

当然、唇と唇も近づいて。

そして。

チュツ……と、本当にそんな音がしたのか分からなかったが、唇同士が触れ合った瞬間、そんな効果音が頭の中に響いた。

あ……俺、今ロザリーとキスしてる。

柔らかい感動がジワジワと俺の脳髓に染み渡った。

だが、本番はここからだ！

「……！」

俺は意を決して、ロザリーの口内に舌を入れた。

受け容れ準備万端だった彼女は、やさしくそれを迎え入れてくれる。

彼女の中はスゴく熱くて、入れた舌が溶けそうだった。

当然、この先どうすればいいかの引き出しなんて俺にはない。

だったらもう勢いだ！

上手くやろうとなんてヘタなことは考えない！

ただ全力で、ロザリーを気持ちよくしてやるんだ！

俺は彼女の舌の下に自分のペロを潜り込ませ、全力で舐め回す。

「……んっんんんん!!」

合わせた唇の間からロザリーの甘い声が漏れる。

つい離しそうになるが、逆に彼女に裾を掴まれた。

これは大丈夫ってことか？

なら、まだまだ全力だ！

「んんんっ！」

ロザリーの声がいよいよ一層激しくなる。

吸精に必要な興奮状態に近づいているみたいだが、まだシ足りないのだろうか？

そうだ……！

「んっ!? んんーんぐ!!」

だっが大好きと言っていたので、舌を入れながらロザリーを再び抱き締める。
彼女の体がビクンビクンと跳ねるのが分かった。

「……ぶあっ! カイト、吸って!」

急にロザリーが口を離して叫んだ。

目を開けると、紅潮した彼女の顔と対面する。

いつまでも見ていたくなるが、今は『吸う』のが先決だ!

彼女の胸はずっと押しつけられていたので、どこに女の子の大事な突起があるのかは把握していた。

俺はそこめがけて……思いつきり全力で吸い付いた!!

「!?!」

途端に俺の全身に流れ込む熱。

これがロザリーの魔力なのか!

スッゲー熱い。

けどなんか体に染み渡る。

魔力切れでダルかった全身に力が漲っていく。



これが吸精！

これが俺の能力！

と、俺がはじめての吸精に感動すると同時に。

「アンツッ！ スゴい、これえ吸われてるう！ カイトに私のオッパイの中身吸われちゃってるよお！」

ひと際大きな声を上げて、ロザリーが仰け反った。

俺の腕の中で仰け反る彼女を一分ほど支え続け……それからやっつと、彼女はポーツとした顔を正面に戻した。

彼女はしばらく惚けていたが、ふとその口許に微笑を浮かべる。

「やったねカイト。無事、吸精成功だ！」

「ああ、全部ロザリーのおかげだ！」

頷いてから、不意に俺は心配になる。

「と、ところで大丈夫だったか？ かなり遠慮なくやっちゃったけど？」

「うん。もちろん！」

「でもなんかフラフラして……」

「私も一時的な魔力切れさ。今日はカイトの召喚にも大量の魔力を使ったからね」

「それって平気なのか？」

「女の子は自分で魔力が作れるから、ひと晩寝れば元通りさ」

「そっか」

どうやら本当に平気みたいで、俺はホッとする。

と、その時ロザリーの手が俺の頭に伸びた。

「はじめての吸精お疲れ様。とつても気持ちよかったよ」

よしよし。

俺にはたくさん至らないところがあっただろうに、ロザリーはそれも含めて「よかった」と褒めてくれた。

「……っ」

前世の俺はバカで運動音痴でおまけにスケベなダメ野郎だった。

おかげで母親に褒められた記憶すら、もうはるか遠い昔の話だ。

人に褒められるのって、こんなに嬉しかったんだな。

俺の大好きな巨乳とか。

命の恩人とか。

もちろんそれもあるけどそれだけじゃなくて。

俺がこの第二の人生を全力でロザリーのために使おうと思ったのは、たぶんこの時だった。

「俺、頑張って最強の魔導師になるよ！　それで魔神王とかいうのも絶対にブッタおしてやる！」

「うん。その意気その意気」

「それで、やっぱり旅とか出るのか？　魔神王の城とか目指したり？」

あと酒場で仲間集めたり、雑魚モンスターたおしてレベル上げしたり。

RPGゲームの定番ならそうだ。

「まあまあ落ち着いて、カイト」

まだ見ぬ冒険を想像して興奮する俺を見て、ロザリーが微笑ましそうに言う。

「そんなに慌てる必要はないよ。だって、魔神王をたおしに行くのは早くても3年後だから」

「えっ？」

ロザリーの思わぬ言葉に、俺は目を丸くする。

「3年後って、え？　魔神王退治ってそんなのんびりでいいの？」

「それは……ふああ〜」

その時、ロザリーは眠そうに目元をコシコシする。

「ごめん。眠くなっちゃったから、その質問はまた明日でいい？」

「あ、うん」

さっきの吸精で疲れたのかな……まあ、急ぐ質問でもないし、明日でいいか。

……って、俺はどこで寝れば？

「ほら、カイトも一緒に寝るよ。ベッドはひとつしかないからね」

「ええええ!？」

マジですか!？」

「何を驚いてるのさ？　今日からここで一緒に暮らすのに」

「え、一緒に!?　ていうかここで!？」

「うん。私はこの研究室で寝泊まりしてるんだ」

部屋の奥のベッドはそういうことか！

些細な疑問は解消されたが、俺の動揺は収まらない。

「ほーら、こっち来て」

まごまごする俺の手をロザリーがやさしく引っ張る。

本当に今夜は、ていうかこれから毎日!?　一緒にここで暮らすのか!？」

「あ、それと明日私の魔力が回復したら、また吸精の練習ね」

「えっ!? あ、明日もやるのか?」

「うん……早く吸精のコントロールを完璧かんぺきにしないとね」

眠そうにしながら次々と重要事項じゅうようじこうを告げないで欲しい。

いや、ひとつも嫌いやなことはないんだけどさ!

「俺、幸せすぎて死ぬかも」

「せっかく生き返ったのに死んでどうするのさ」

泣きながら神に感謝かんしゃを捧げる俺を見てロザリーが笑った。

第二章

▽ロザリーの個人レッスン△

先週から、私はとある男の子と一緒に暮らすようになった。

男の子の名前はカイト。この世界では魔人と呼ばれる異世界人だ。

男の子男の子と言ってるけど、本当は私より年上だったりする。

でもついそう呼んじゃうんだよね。

なんだかわいくて。

元の世界で死んで魂たましいになっていた彼を、私は古い文献ぶんげんから得た召喚魔法しょうわんまほうでこの世界よに喚

び出した。

彼との生活はとても順調じゆんてうだ。

朝はふたたび朝食を食べて、その後は午前のレッスン。

彼にはこの学園がくえんの中途入学試験ちゆうとくがくしけんを受けてもらうつもりなので、こちらの世界の常識や魔

法の基礎きそを教えている。

「えっと、つまり魔法を構築する魔法式には基礎式と副式があるってことか？」

「そうそう。魔法の発動に必要なのが基礎式、それに効果範囲はくいや持続時間とかを副式で付け足す感じだよ」

「なるほど」

この付きっきりの個人レッスンも今日で一週間。

彼はとても頑張がんばってくれている。

本当に、とつても。

それが私にはたまらなく嬉しい。

まあ、それを今言つても彼には伝わらないだろうし、この感謝の気持ちを伝えるのはまだ先のことだろう。

それはそれとして、彼とのレッスンは昼食、午後を経て、夜まで続く。

ある意味で、彼にとって一番大事なのは夜のレッスン。

ズバリ、吸精の練習だ。

夜。研究室のベッドで、いつものように私はカイトと向かい合う。

「それじゃあ今日は昨日のおさらいから。私の服をスマートに脱ぬがしてみよう！」

「おう！」

元気のいい返事。

でも私の服のボタンをはずすカイトの手はちよつと震ふるえている。

顔もとつても赤くて、彼が照れているのが分かる。

「~~~~」

そんな顔されると、私も照れちゃう。

私は『先生』だから、あんまり表情に出さないように頑張るけど。

やがて彼が上着のボタンを全部はずす。

すると大きな解放感があつて、私の胸が自由になった。

「!!」

その光景を見て、またカイトが赤面する。

かわいいなあ。

毎回動揺する彼に不思議な愛らしさを感じる。

私だって本当は恥はずかしいけど、一緒に吸精を頑張りたくなる。

「ほら、カイト。下着も脱ぬがせて」

「う、うん」

カイトはぎこちない手つきで私の下着も脱がせる。

「……………」

完全に露わになる乳房。

羞恥ですでに先っぽも硬くなり始めている。

これはさすがに私も頬が熱くなる。

カイトは胸に釘付けで、私の顔が赤くなっているのには気づいていないみたい。

それはそれでとても助かるけど…………。

「…………もう！ いつもジロジロ見てえ！」

つい我慢しきれず、私は自分の胸を両腕で隠してしまおう。

するとカイトはビクツとなつて平謝りし始めた。

「ゴ、ゴメン！ ロザリーのオッパイがあまりにも魅力的すぎて！」

うーん、そんな怒つたつもりはないんだけど。

ちよつと恥ずかしかつただけだし。

でも、毎回凝視するんだもん。

カイトつてよっぽどオッパイが好きなのかな？

だとしたらちよつとエッチだけど…………私も胸には自信アリなのでラッキーだ。

「もー仕方ないなあ」

私は半分照れ隠しで怒つたフリを続けながら、自ら腕をどかす。

同時に、お腹の聖母の紋章が淡く輝き始めた。

これは私の体がカイトに「吸精されたい」と準備を始めた合図。

「ンツ……………」

お腹の奥からジンワリとした熱が広がって、全身がジワジワ熱くなってくる。

なんだか吸精のスイッチが入るのが日に日に早くなっている気がする。

毎日している内に、段々私の体が調教されてきちゃったのかな？

そんなことを考えている間にも、肌は火照ってピンク色に。

体中がカイトを求めて敏感になっていく。

私の魔力を吸って欲しくて胸がわななき、それを我慢しようと内股を擦り合わせる。

「さ、さあ、続きだよ」

私は今すぐカイトの頭を胸元に抱き寄せたい衝動を堪えつつ、なるべく冷静に吸精を促す。

しかし、ただ吸わせるだけではレッスンにならない。

吸精は女の子の性的興奮によって魔力吸収の効率が上がる。つまり「女の子をエッチな気分させる」技術がカイトには必要だ。それもなるべく沢山。

だから彼には私の体を練習台に、いろんなテクニクを身につけてもらう必要がある。

「今日は……そうだね、お腹にしてみよっか？」

「了解」

私からのお題を聞いてカイトは頷く。

彼の視線が下がって……たぶん、私のおへそ辺りに狙いを定めた。

「……っ！」

カイトの手の平がお腹をやさしく撫でる。

それだけで、キュンッ、とお腹が引っ込んだ。

「ッ……んん！ ……っ！」

今日はちよつと「軽め」にと思ったのに……！

え？ お腹撫でられるのってこんなに気持ちいいの？

いや、さすがにいきなり限界ってほどじゃないけどさ……！

触られたところから頭のとっぺんまでピリピリする。

自分で撫でたって何でもないのに。

男の子の大きな手に触られるとお腹の表面だけじゃなくて、もつと奥の大事な部分まで刺激されている気がしてくる。

「……どうだ？」

カイトが私に尋ねてくる。

「触り方がやさしいから、ちよつとこそばゆい……かな？」

私はなるべく冷静な感じに答えた。

「気持ちよくないか？」

「ううん、そんなことないよ。けど、もつと工夫できるかも」

「分かった」

私の言葉に頷き、カイトはちよつと考え込む。

うー、先生らしく余裕ぶったけど結構キてるよー。

けどここで満足させてしまったら、彼の向上心を閉ざしてしまう。だからまだ余裕のあるフリをする。

「はあ……はあ……」

荒い呼吸……カイトに気づかれないように。

だけど全身が汗ばむのは止められなくて、自分でも見てて恥ずかしいくらい、照明の光でテラテラと肌が輝いている。

「……よし！」

と、そこでカイトが次の行動に移った。

彼は私のお腹に顔を埋め——汗ばむ肌に舌を這わせた。

「~~~~~！」

私は思わず両手で口を押さえた。

カイトの舌が……！ それに息がかかつて……！

彼は頭で円を描くように舌を動かす。

「……ンツ！ ……ヒツ！」

舌のざらつきが一周する度に、私は腰が跳ねそうになるのを必死に我慢する。

内股を擦り合わせる余裕すらなくて、快感の波をやり過ごすために私は両脚に目一杯の力を込めなければならなかった。

それでも腰がプルプルと震えるのまでは堪えきれない。

きつとその振動は彼にも伝わっていて……それを思うと、私は羞恥でさらに胸が張り詰めるのを感じた。

昂ぶった魔力が先にオッパイから噴き出しそう！

と。

「ンヒアア！」

カイトが舌を私のおへそに入れた。

「アツ！ イイツ！」

もう余裕を繕うこともできなくて、私は徹底的に彼におへそをほじくられた。

手の平で撫でくり回されて敏感になったところを、さらに舌でちっちゃい穴をほじくるように責めるなんて……こんなのもう、無理だよお……。

「もう、いいよお、カイトお」

私がグツタリとした声で降参すると、カイトが顔を上げる。

一瞬、少し涙でぼやけた視界越しに彼と目が合う。

「吸ってえ……！」

私が懇願するとカイトは頷いて——とうとう昂ぶりに昂ぶりを重ねて限界まで張り詰めた私の胸から、盛大に魔力を吸い始めた。

同時に襲い来る多幸福感。

胸の先端から全てを吸い尽くされるような感覚と、逆に痺れるような快感が胸から脳髓

へと駆け上がったいく。

「ふああ！　アツ、カイトオ！」

魔力を吸われる快感、快楽に吞まれていた私は失念していた。

女性の乳房はふたつある。

彼の手が、もう片方の空いているオツパイを揉み始めた。

「はああん！」

全身の神経がそこに集まったみたいに、彼の五指が与える刺激に私は敏感に反応してしまつた。

跳ねる腰。ベッドから落ちそうになる。

それをたぶん咄嗟に、彼は私の体を抱き寄せた。

「……ッ！」

自分でも何で「だっこ」が気持ちいいのかわからない。

けど、男の子の腕で力強く抱き締められると、私の小さな体がギユツとなって、敏感な全身が彼と密着して、その全部の快感で頭がバカになっちゃう。

「カイトお、カイトお！」

私もカイトの頭を両腕で胸に押しつけて、両脚を彼の体に回して全身で抱きつく。

「ンツ……アアアアアア!!」
もう我慢なんてできなかつた。
私は自分が達するのを感じながらあらん限りの嬌声を上げた。

▽俺が学園に入る理由△

日課の吸精を終え、俺とロザリーは抱き合つてベッドに横になっていた。

「カイトはドンドン吸精が上手くなつていくね。私も嬉しいよ」

しばらく気を失っていたロザリーだけど、目を覚ますと彼女は真っ先に俺のことを褒めてくれた。

「ありがとう。全部ロザリーのお陰だよ」

「カイトの努力の賜物さ」

それはたぶん俺がスケベ野郎だからです！

そんな俺のことをロザリーはとても褒めてくれる。

「えらいえらい」

「……!!」

小さくて柔らかい手で頭を撫でられ、俺は年甲斐もなく照れてしまう。

彼女は俺が何かできる度にこうしてよく褒めてくれた。

照れ臭いけど、本音はそれが嬉しかった。

おまけに彼女は物を教えるのがスゲー上手い。

勉強って褒めて伸ばしてもらう方がいいと思った。

あと正直エロのためならいくらでも頑張れる気がする！

「だいぶカイトの中にも私の魔力が溜まっただろうし、そろそろ学園の入学試験受けてみようか」

「……」

——ノートンクロス魔導学園。

創立三百年を超える魔導連盟を母体とする魔導師育成機関。

学生以外の魔導師も多く在籍しており、この国の魔導師のほとんどがここに集まっているといっても過言ではない。

当然、魔導師なのだから全員が女の子。

つまり女の子だらけの学園なのだ。

そこへ入る目的は、三つ。

ひとつ目はもちろん魔法の勉強のため。

ふたつ目は『プロ資格』を得るためだ。

「人類と魔神王が戦い始めてもう三百年は経ってるんだ。その間にいろんな法律が整備されてね、学園を卒業したプロ魔導師でないと前線に出てはいけないことになってるのさ」

「何でそんな面倒なことにな？」

「もちろん余計な犠牲を出さないためだよ。どんな傑出した才能も、磨かなければただの原石だ」

実際、過去に才能を持って囃された天才が若くして前線に赴き、戦場での不運で早死にした例が沢山あったらしい。

そうした過去の反省から作られたのが魔導学園とプロ資格制度。

貴重な戦力を失わせないためにも、若者にはキチンとした教育を施してから戦場に送り出すのが国の方針というわけだ。

ロザリーの言った「魔神王退治は早くて3年後」というのは、学園卒業までに必要な期間のことだ。

ここまでは俺も聞いてすぐに納得できた。

でも、最後の三つ目。
 これがちょっと俺の中で引っかかっている。
 俺が学園に入る三つ目の理由——それは「ハートレム作り」なのだ。

「なあ……本当に、ロザリー以外からも吸睛しなくちゃいけないのか？」

それがどうにも後ろめたい俺は改めて訊く。

俺の質問に、ロザリーは「うん」と頷いた。

「前にも説明したけど、魔人のカイトは私と同じ零魔導師だから、どれだけ頑張っても零魔法しか使えないんだ」

「……うん」

この世界の魔法は主に精霊の力を借りるものが一般的だ。

精霊は種類によって火・水・風・土・光・闇とそれぞれ属性を持ち、魔導師ごとに相性のよい精霊は異なる。どの属性の精霊との相性がよいか、その魔導師の得意な魔法に関わるそうさ。

「それが精霊魔導師、所謂普通の魔導師だ。」

一方で、魔法の才能を持ちながら全ての精霊と相性が悪く、精霊の力を一切借りられない

い魔導師がいる。

「そんな魔導師のことを、普通の魔導師と区別して『零魔導師』と呼ぶそうさ。」

精霊の力の恩恵を受けられない零魔導師は、火魔法や水魔法などといった精霊魔法は当然使えない。

その零魔導師が唯一使えるのが、精霊を介さない魔法——『零魔法』なのだ。

しかし、単に普通の魔法が使えないだけならまだよかった。
 だが……。

「問題なのは、その零魔法の燃費の悪さだ」

普通の魔法は「魔導師の魔力＋精霊の魔力」で行使されるが、零魔法は魔導師本人の魔力のみで行使する。なので当然、普通の魔法よりずっと燃費が悪い。

たとえば同じレベル1魔法でも、零魔法は2〜3倍の魔力を消費する。

そんな零魔法をバンバン撃つたら、あっという間に魔力切れで死んでしまう。

だから俺が最強の魔導師を目指すには、膨大な魔力消費量に耐えられる大量の魔力が必要なのだ。

「私ひとりじゃ、カイトに必要な魔力を全て賄いきれない。だから、私以外にもきみに魔力を供給してくれる女の子が必要なんだ」

「……だよな。だからハーレムを作らなきゃなんだよな」

ロザリーが語るハーレムを作る必要性に、俺は小さく頷く。それは分かっている。分かっているんだけど……。

その時、彼女は俺の頭をそっと抱き寄せた。

「ごめんね。もしかして、嫌な思いをさせてる?」

「……いや! そんなことは」

俺は顔を上げ、ロザリーの悲しそうな顔を見つめて言う。

俺は彼女の夢を叶えたと誓った。

それは、何があっても絶対だ!

その彼女が必要だと言うなら、ハーレムを作るのは必要なことなのだ。

「……でもやっぱり、他の娘から吸精するのって、ちょっと後ろめたく思っちゃって」

「そんなの、私がお願しているんだから気にしなくていいんだよ」

「うーん」

「それに、私はカイトのこと信じてるから」

「?」

「この一週間、カイトは一度も私にヒドいことしなかったでしょ? 男の子なら、もっと

私にいろんなことしたいと思うはずなのに」

「命の恩人にそんなことできるわけないだろ!」

「ふふっ、分かっているよ」

思わず必死になる俺に、ロザリーは微笑んで頷く。

「だから、カイトなら私以外の娘にもやさしくできるよね?」

「も、モチロン!」

「期待してるよ。入ったみーんが幸せになれるハーレムを作ってるね」

おおう、ただでさえ高いハードルがさらに高くなった気がする。

ロザリー公認とはいえ、誰もが幸せになれるハーレム。

そんなものを作る甲斐性が俺にあるのか?

いや、ロザリーのためにも作らなければならぬ。

完璧かつ究極のハーレムを!

「分かった! これ以上はウジウジ悩まない。俺は学園に入って最強のハーレムを作る

ぜ!

「うんうん! その意気その意気!」

俺が気合いを入れ直すと、ロザリーは応援するみたいにぎゅーっと抱き締めくれた。

続きは、2月20日発売のファンタジア文庫で!